

全日本総合バスケットボール選手権大会TO研修報告書

山口県TO委員長 兼重 晃

平成28年1月2～3日の2日間、全日本総合バスケットボール選手権大会でのTO研修を行いましたので報告いたします。

1. 参加者

車椅子連 中野 龍一 クラブ連 中野 章吾 ミニ連 中本 朋仁
中体連 友利 彩子 委員会顧問 小坂 祐三 TO委員長 兼重 晃
以上6名

2. 旅程について

1月2日（土）

- ① 山口宇部空港発（7：45）→ 羽田空港着（9：15）
- ② 岩国錦帯橋空港発（7：50）→ 羽田空港着（9：00）
- ③ 羽田空港（全員で）→ 浜松町 → 原宿駅 → 代々木第1体育館（小坂氏合流）
TO研修 第2試合（14：40～：代々木第2体育館）
- ④ TO研修後 代々木第1体育館 → 原宿駅 → 品川駅 → 大井町駅 → ホテル
ホテル：ヴィアイン東京大井町

1月3日（日）

- ① ホテル → 大井町駅 → 品川駅 → 原宿駅 → 代々木第1体育館
TO研修 第1試合（12：00～：代々木第2体育館）、
第2試合（14：00～：代々木第1体育館）
- ② TO研修後 代々木第1体育館 → 原宿駅 → 品川駅 → 羽田空港国内線
ターミナル駅
- ③ 羽田空港発（19：10）→ 山口宇部空港着（21：00）
- ④ 羽田空港発（19：15）→ 岩国錦帯橋空港着（21：00）

初日、飛行機では正月の帰省客、山手線では明治神宮への初詣客が多く、会場へ着くまでに疲れてしまった。会場に着いて本間TO委員長とTO控室へ行き、控室にて本間氏に事務的なことや機械の操作などについてレクチャーしていただいた。その後、担当のゲームまで時間があつたので第2体育館へ行き、観客席からTOの状況を見学し、ハーフタイムではTO席の後ろに行き、機械などの配置などの確認をした。

担当ゲームは、S：中野章、AS：中野龍、T：中本、SC：友利で行い、割り当てのなかった小坂、兼重は観客席で4人の様子を見学した。4人は担当のゲームの開始までの時間を使い、機械操作などを行って少しでも慣れるように工夫をしていた。

ゲーム後は、TO主任の吉宇田氏から感想・助言をいただき、それを踏まえて6人で反省会を開き、明日に備えた。反省会后、観客席から第1体育館のゲームを観戦し、体育館を後にした。

2日目、11時前に会場入りした。この日から男女とも3回戦となり、シードであるNBL、WJBLのチームが登場するので、会場前に多くの観客が開場時間前から並んでいた。

控え室で、TOMやTOメンバーズマニュアルの作成において大変お世話になった八丁氏にお会いし、第1体育館の機械操作についてレクチャーを受けた。

担当ゲームは、第2体育館の第1試合は昨日と同じメンバー・役割分担で行い、第1体育館の第2試合は、AS：小坂、T：兼重、とNBLなどのTOスタッフである、S：八丁氏、SC：尾崎氏の混合チームで行った。

ゲーム後、TO主任の吉宇田氏や、八丁氏、尾崎氏に感想・助言をいただいた後、6人で再度反省会を開き、帰路についた。

3. TO研修ゲームについて（全体を通して）

担当したどのゲームもいくつかのミスがあったが、大きなトラブルにはならなかったが、初歩的なミスもあったので、もう一度規則書やTOMなどを使ってルールの確認をすべきだと思う。また、日頃使用している器具とは異なったものばかりだったため、特にアシスタント・スコアラーは、不慣れな器具に慣れるまで大変だったと思う。県内大会でも日頃使わない器具でTOをすることもあるので、時間があれば器具に慣れることを積極的に行い、トスアップまでに試合に集中できるように不安材料を取り除くようにしなければならないと思った。

各担当ゲーム後、反省会を行ったが、皆が意欲的に意見などを言い合う事ができ、とても有意義な時間となった。

また、今回はNBLの方と一緒にTOさせていただき、トップリーグのゲームを担当される方のTOの様子を間近に見ることができ、どのようにTOをすべきなのかを肌で感じ取ることができた。特にTOメンバー内のコミュニケーションについて、4人全員のコミュニケーションも必要ではあるが、スコアラーとアシスタントスコアラー、タイマーとショットクロックオペレーターそれぞれのコミュニケーションが最も大切であること、コミュニケーションを取るためには会話が不可欠であることを改めて感じた。それぞれの2人が的確な会話をする事で互いにカバーをし、ミスなくまたミスをトラブルにしないようにすることができると思った。

4. 参加者の感想・反省レポート

車椅子連盟 中野 龍一

期日 1月2日(土) 14:40～

試合 女子2回戦 桜花学園 48 VS 61 羽田ビッキーズ

Pre-Game Conference

- ・とにかく声を出して隣とのコミュニケーションを図る。
- ・ファウルが起こった場合、①個人ファウル数、②チームファウル数、③パソコン入力の順で行うこと。
- ・TOテーブルのビジュアルサイン(ファウル表示)を最優先させ、電光掲示は後回し。
- ・機器の性能上、個人ファウルの修正はそのQuarterの中でしか出来ないなので、入力ミスがあった場合は、次Quarterに持ち越すと全リセットすることになるので注意すること。

講評

- ・ASの役目はSの目であり、Sに得点及び得点者、ファウルNo.等を確実に伝えなければならない。
- ・ファウルのNo.及びファウル数は、ASがSに教えるつもりで管理すること。(PCに表示されているはず)
- ・TOテーブルの配置からすれば、ASと24は両チームからのTime Outや交代に対し敏感に気付かなければならないが、Sが先に気が付くことが多い
- ・この試合ではSの負担が大きく、両チームの試合運びによっては問題が起きそうな要因が多々あった。

自評

- ・大舞台でのTOではあったが、緊張することなく取り組むことが出来た。
- ・初めて使用するTO機器の取り扱いに慣れていないことで、開始早々にチームファウル数が勝手に3つ表示されて困ったが、隣に座っていたスタッフのメンバーが口頭で操作を教えてくれて対処できた。
- ・ファウルの後の機器操作に手こずりフリースローやフィールドゴールを見落とし、Sに確認してしまった。
- ・個人ファウルの修正の問題で、慎重になり過ぎてしまい、ASとしてSをアシストできなかったことを反省する。
- ・隣のスタッフメンバーが大きな声でBox Scoreを記入していたので、その声に甘えていたこともあるが、終わってみれば、チームとしてCrewを助け合う協調性に欠けていた。

期日 1月3日(土) 12:00～

試合 女子3回戦 JX-ENEOS サンプラウズ 96 VS 51 早稲田大学

Pre-Game Conference

- ・昨日の反省として、声でCrewに伝えることと、伝える内容(得点・得点選手)の確認。

- ・ゲームの流れから、**Time Out** や交代のタイミングを感じ取り、**Crew** に伝える。
- ・ファウル・バスケットカウント・**Time Out** ・交代等が一気に重なった場合の記入漏れ対策として、**ME**等で必要事項を管理する。

講評

- ・前半で早稲田大学が 2 回目の **Time Out** を取った時点で審判に伝えなかったことについて、ゲームの流れから大事に至らずに済んだが、万が一、早稲田大学が 3 回目の **Time Out** を請求し、気付かなかった **TO** がブザーを鳴らしたとしたら、それが接戦状態でどちらかのチームに影響があったとしたら責任は重大であると言われた。
- ・**TO** は審判をフォローするという役目があることを忘れない様にし、**S** が忙しい時間帯は **AS** が代役するというチームワークが必要。それぞれの担当を入れ替えて経験すれば判ることもあるとのコメントを頂いた。

自評

- ・3 回戦になると、ゲームの流れが前日に比べ慌ただしくなり、審判のコールに対する **TO Crew** の集中力も自然と高まったてきたと感じた。交代や **Time Out** に対する声掛けは出来ていたものの、前半の **Time Out** 数を審判に伝達するタイミングを逃したことを反省する。3 回目の誤申請に対する準備は出来てはいたが、**TO Crew** 全員が把握できていなければミスが起きる可能性が高いことを学んだ。
- ・**S** への情報伝達は自分が意識することで自然と出来るが、スタッフメンバーの声と重なることに違和感を感じていた。

所感

- ・今回担当させて頂いたゲームでは各担当個人での役割りは出来ていたが、**TO** チームとして（特に **S** と **AS**）のコミュニケーション不足によるミスが発生し、ミスがゲームに与える危険因子であることを再認識出来た。
- ・大会会場の機器の操作性については事前に扱いに慣れる時間が必要であると共に、**TO** としての大会運営の確認（特にゲーム終了後のスコアボードのサイン記入が事前入手資料と異なっていた）等も必要であったと感じる。
- ・今回の研修では県内大会での **TO** 機器とのギャップはあったものの、**TO** 委員がゲームに携わる役目の重大さを感じる事が出来たことが一番の収穫でした。
この様な経験をさせて頂いた県協会審判委員長に感謝すると共に、今後は、この経験を **TO** を担当される方々に伝えていくことに尽力したいと思います。

以上

担当の2試合ともにメンバーは固定して臨みました。

到着し、TO 大会本部に挨拶と ID カードの受領や機器取扱い、注意点などの説明を受けた。

思った通り使用する機材も初めての物で特にアシスタントスコアラーは苦心したと思いました。また、二日間ともにスコアシートの所在が本部内で周知されておらず、試合前に慌ててしまう要因となった。

(1月2日 女子二回戦 桜花学園 - 羽田ヴィッキーズ)

前試合が遅れ、使用する機材を満身に操作することも出来ず、10 数分前に着席し、バタバタな状況で試合に突入した。

かなり緊張をしたが事前に TYS 杯で小坂氏よりアドバイスされたメモ用紙を傍らに用意したこともあり、ファウルレポート後の交代などでも慌てる事なく対応出来、有効な方法であることを認識しました。

前半、桜花学園がライブ寸前にタイムアウト請求に来て、即座にブザーを鳴らし主審がこれを認める場面があり、試合後にギリギリの請求だった為に次回デット時に認める方が良いのでは？との助言であったが、後で主審(安西氏 埼玉県)へ助言を求めたが問題無いとの見解で救われる思いであった。メンバーとしては全員で協力のつもりで、気が付いた事を連絡・復唱していたつもりだが、スコアラーはもう少しスコア記入に集中した方が良いとの助言を頂き、自身達の方法に迷いが出てしまった。

(1月3日 女子三回戦 JX-ENEOS サンフラワーズ - 早稲田大学)

前日に一試合を経験し、主任からの助言を自分たちなりに整理して試合に臨んだ。

また、副審が昨日と同じ窪田氏(佐賀県審判長)と山口県の米村氏であったので気持ちの余裕が随分出来た。

試合は昨日とは打って変わりレベルが高く、高得点の試合で交代やタイムアウトの請求、ファウルレポートのやり直しなど戸惑ってしまう場面も遭ったがチームワークで乗り切れました。

前半2回目のタイムアウトを審判に連絡していなかった事を厳しく指摘され、中野龍一氏と伝え方などを再確認し、後半におとずれた3回目のジェスチャー時に3回目であることを伝えることが出来、試合で修正した。

ただ、試合後に大きなトラブルを起こす因子が存在するとの指摘を受けた。(タイムアウト使いきの連絡不徹底など)

おわりに

今回、日本最高峰の大会に委員として参加出来たことを光栄に思います。また、県外に出て改めて山口県審判委員会の良さなどを確認出来ました。

最初はTOなど余り目を向けられない事が多かったのですが、TOをやって改めて規則の正しい

理解の大事さを思い知りました。

特に審判員育成の課程としてTO実技研修などをしてTOへの理解などを深めていくことも普及方法の一つと思いますし、可能な限りAJなどの大会派遣を継続することも肝要に思います。

最後に今回大会へ尽力下さいました県協会、有澤審判委員長殿、兼重TO委員長殿、小坂先生、他TO委員にも改めて厚く御礼申し上げます。今後も自身の努力を怠らず、今回の経験などを県内、連盟を超え還元します。

大変ありがとうございました。今後ともご指導、ご鞭撻のほど、よろしく申し上げます！

以上

宇部地区 ミニ連盟 氏名 中 本 朋 仁

はじめに、県協会及び審判委員会の方々にごこのような貴重な経験をさせて頂いたことを心より御礼申し上げます。

1月2・3日に代々木体育館他で開催されているAJ2016へTO研修という形で参加致しました。担当 TO は以下の通り割当を頂きました。

- ・1月2日(代々木第2体育館)桜花学園高等学校VS羽田ヴィッキーズ
- ・1月3日(代々木第2体育館)JX-ENEOS サンフラワーズVS早稲田大学

2日間通してタイマーを担当させて頂きましたが、AJでは4名でゲームを担当。ゲーム開始前、全員で器具の確認後、ミーティングを行った。ミーティングの中で一人ひとり各役割の確認等を行い、特にタイムアウトの請求や交代の請求、得点の番号確認、ファールの番号確認と全員で声を出して確認しようということでゲームがスタートした。タイマーはしっかりレフリーの笛やプレーを見てスタート、ストップさせる動作で各日試合通して任務できたと思う。その分、ショットクロックやスコアラーのフォローにと声を出して知らせた。1日目の声だしの中で、下手に声を出すとショットクロックの方を混乱させてしまうとか、スコアラーの方も同じく混乱の原因を作ってしまったのではないかと個人的に思っていた。しかし、TC 担当の方にはもっと個々の役割をしっかりと再確認と言われ2日目に挑みました。しかし1日目に思っていた声を出すと混乱というのが頭から離れず声を出したり出さなかったりと益々混乱させた形となったように個人的に思った。TC の方に案の定そこを突っ込まれる始末。反省すべきところであった。

本部や他県のTOの進め方を見たかったが立見禁止ということもあり見ることはできなかったが今回の経験を山口県に持ち帰り参加メンバー皆で経験を活かし研修会等で発揮できるよう仲間を増やし山口県 TO 委員会をより厚く、より充実するようさらに邁進してまいりますので、今後ともご指導の程、よろしくお願い致します。

以上

○1月2日(桜花学園高等学校 VS 羽田ヴィッキーズ)

ALL JAPAN ということでとても緊張したが、直近の t y s 杯で練習していたので、陥りそうなミスに備えながらでき、ショット・クロックのミスはほとんどなく終えることができた。しかし、個人ファールを間違えて立ててしまった。原因は、審判のコールをしっかり確認していなかったことである。ディレクションをよく見て落ち着いて対応しないといけないと思った。その際、私が間違えたことをすぐにアシスタント・スコアラーが伝えてくれた。記録の方が気づいてくれたのだが、声を出して個人ファールを立てたのもミスを気づけたことにつながったように思う。

試合が終わった後の反省でコミッショナーから言われたのは、「TO チームとしてもっと声を出していい。」とのことだった。しかし、t y s 杯で研修したときに24秒所オペレーターは、「見極めに集中するために黙々とやろう。」とみんなで話し合った。地域によって TO の考え方・方法が違うので、「それはそのチームによってやりやすい方法でいい。」というアドバイスをいただいたので、東京でのやり方から学ぶことは学び、より良い山口県の TO のオペレーションを確立できたらと思った。

○1月3日(JX VS 早稲田大学)

昨日と打って変わり、展開がとても早く、集中力がより必要な試合だった。JX のディフェンスに対して早稲田が攻めあぐね、オーバータイムになりかけたり、実際になったり、微妙な保持の切り替えがあったりと、とても難しい場面が多々あった。多くの場面は切り抜けられたが、ショットで1回、保持の切り替えで1回ミスがあった。原因は、リングにかするぐらいのシュートでよくわからず、確認もせずに24秒リセットにし、それに動揺してオフェンスが取ったのにそのままにしていた。コミッショナーに言われて気づいたが、声をかけられる前に自分で落ち着いて14秒リセットしないといけなかった。加えて、微妙なシュートもあると心積もりをして、もっと集中してリングとボールを見ないといけないと思った。保持に関しては、微妙な時はリセットせずに待つようにと、アドバイスをいただいた。あとは審判が判断することになるので、今後は微妙な場面ですぐに判断せず、待つという考えをもって臨みたいと思った。

○まとめ

声を出すことは大切なことだと改めて思った。また、オペレーションとしては、スコアラーとアシスタント・スコアラー、24秒とタイマーで連携を図ってやると、スムーズにいくように思った。まだまだ改善する点があると思うので、今後も研修を通して成長していけたらと思った。

1999年オールジャパンで、兼重、奥野、河村3氏と共にTO研修を行った。今回は、17年ぶりのオールジャパンTO研修であった。小坂は、兼重委員長と共に、日本協会のTO委員と組んで3日に第1体育館で行われた男子3回戦東海大学対日立サンロッカーズ東京のゲームを担当した。組んだメンバーは、NBL等の経験も豊かな八丁茉莉佳氏と尾崎正隆氏。二人とも若いが、優秀なテーブル・オフィシャルズメンバーであった。八丁氏は、今大会のTO副委員長でもある。

TOは4人で協力するものではあるが、スコアラー+Aスコアラー、タイマー+ショットクロックオペレーターの2組に分かれて仕事を行うと考えると分かりやすい。Aスコアラーはスコアラーの補助を、タイマーはショットクロックオペレーターの補助をすることを基本とすると、仕事が整理しやすくなる。今回の研修では、この思いを強くした。実際、小坂は、ゲーム中スコアラーの八丁氏と連携しながら任務を遂行したが、タイマーやショットクロックオペレーターのアシストはほとんどしていない。

八丁氏がスコアラーを務める姿には、「プロ」意識を感じた。常に声出し確認を行い、コート内外のあらゆるできごとに瞬時に反応できるよう、アンテナを張っている。とにかく、仕事が確実・迅速・丁寧で、さらに「守備範囲」が広い。

具体的には、得点の度にOKサイン（サムアップ）を出し、得点合計と選手の番号を声に出して確認。ファウルは、レポートする審判のジェスチャーを見ながら番号の声出し確認。タイムアウトや交代もAスコアラーの自分より先に気付き、「白、交代OKです」などと声を出してホーンの準備をしていた。フリースロー時の交代では、2本目のときに「シュート入ったら交代です」と声を出してホーンの準備。得点、ファウル、交代が重なっても、決して慌てない。ひとつずつ的確に処理していく。後半になると、得点の度に（特に負けている方の）ベンチの様子をうかがい、急なタイムアウトの請求に備えている。

「Aスコアラーのアシストは無用」とも思えるほどの仕事ぶりであったが、ゲーム前には「私は、得点や選手番号をしゃべり続けるタイプなので、確認できたら『はい』とか『OKです』とかで答えてください」とも言っていた。得点やファウルを正確に記録していくためには、Aスコアラーのアシストはやはり不可欠である。

八丁氏は操作盤の操作にも慣れていて、不慣れな小坂の操作ミスをいとも簡単にカバー・修正してくれた。

審判との信頼関係も強く感じた。どの審判もファウルのレポートは、決して急ぎすぎず丁寧であるし、ゲームのリスタートの前には必ず八丁氏を見て、必要な処理が終わって準備ができているか確認をしていた。まさしく、審判とテーブル・オフィシャルズが連携してゲームを支えている姿であった。

八丁氏の仕事ぶりに、「ここまでやるのか」と感服した。と、同時に「やっぱりここまでやらなきゃ」と強く感じた。

ゲーム自体は、東海大学の奮闘により見応えのあるナイスゲームだった。そのゲームのTOを、日本のトップのメンバーと共に担うことができたことは、自分にとって素晴らしい経験であった。AllJapanといえどもルールは県内の試合と同じなので、今回の研修で目新しい知識が得られたわけではない。ただ、八丁氏と一緒にTOをやってみて、ハッと気づかされたことは多い。この、「ハッとした部分」を山口県バスケットに還元していくことが今後の課題である。

今回の研修の機会を与えてくださった山口県バスケットボール協会審判委員会に深く感謝します。山口県バスケットボールにおいて、TOの重要性がより深く認知され「文化」として根付くよう、今回の研修の成果を生かしていくことを約束し、報告といたします。

1月2, 3日に代々木体育館第1, 第2体育館にて5年ぶりにオールジャパンのT Oに山口県から6名参加した。前は山口国体の年でもあり、国体T O委員長としての私は、できるだけ多くの経験を積んで、それを補助員生徒やT O委員の方へ還元できればという思いであった。今回は小坂氏と兼重がN B L等で活躍されている八丁氏と尾崎氏と一緒にT Oすることとなり、今まで行ってきたT Oの知識や考え方などを見直す良い機会となると思い、楽しみにしていた。

1月3日に代々木第1体育館で東海大学対日立サンロッカーズの試合を前述4名で担当した。

私はタイマーを担当したが、八丁氏と尾崎氏の2人のT Oの姿を見ていると、決して慌てることなく的確かつ丁寧に行い、その素晴らしさの反面、自分の未熟さを感じることもあった。

ショットクロック担当の尾崎氏は、「試合中、独り言を言いますが気にしないでください。」と言われた。しかしその声は、ショットクロックが残り14秒を切ると、「14秒」、リバウンド後、「白ボール」、「青ボール14秒」、フロントコートでのアウトオブバウンズに、「継続残り18秒」など、常に状況を的確に声に出していた。またスコアラーの八丁氏は、得点が入る度に、審判に大きくOKサインを出し、「青5番2点 合計35点」と言い、タイムアウトや交代にすぐ対応できるように常にベンチに目を向けていた。特に得点が入った後は、ホーンのスイッチに手を置き、必ず入れられた側のベンチを覗き込むように見ている。それに対して小坂氏や私は「はい」と返事を繰り返していた。

ミスが起こると、ベンチ(コーチ)はクレームをつけるが、そのクレームに動ずることなく対応をしていた。また、特にN B Lチームのコーチやプレイヤーの癖などを把握しており、常に先を予測してT Oを行っていた。

私自身の反省として2つあげたい。一つは尾崎氏がショットがリングに触れたかどうか確実に確認できず、「当たりましたよね。」と言われたときに、即座に返答ができず、小さな声になったことがあった。ショットクロックオペレーターはタイマーのカバーを、タイマーはショットクロックオペレーターのカバーをしなければならない。こういう時こそ即座に返答をできるようにしっかり見ておかなければならないと思った。もう一つは、ゲームがリスタートするとき、まだ準備が整っていなかったのにもかかわらず手を挙げてしまい、八丁氏を慌てさせてしまった。日頃からタイマーには手を挙げることは、「時間を止めること」と、「T Oが準備ができたこと」とを表していると言っている。ゲーム後、控室でそのことを話すと、準備が整っていないときに審判がゲームを始めようとしたら合図器具を鳴らして止めることもあると言われた。

審判とのコミュニケーションについてであるが、この試合を担当された審判の方は皆、ゲームを始めるときには必ずT Oをしっかりと見てT Oメンバーとアイコンタクトを取りゲームを開始・リスタートした。自分が審判をするときにT Oの様子を確認するには

しているが、つい疎かになってしまうことがある。これからの審判に生かしていきたいと思うと同時に、「審判とTOが一緒になってゲームを運営している」ことを実感した。

以上

5. 最後に

今回、年度当初の事業計画にはなかったにもかかわらず、このような機会を与えていただいた有澤審判委員長をはじめ審判委員会の皆様に大変感謝しています。この経験を生かし、今年度より歩み始めたTO委員会の活動を充実させ、山口県バスケットボールにおけるTO活動の普及・発展を目指し、微力ではありますが頑張っていきたいと思います。